

次々とそこにいたチンパンジーの名前やチンパンジーの食べる植物について教えて下さりました。その姿はまるで自分の家族を紹介するようで、西田さんのマハレのチンパンジーに対する愛情を感じました。

数年前に今マハレで調査をしている学生の松本さんを西田さんに紹介したときのことも印象深く覚えております。西田さんは、チンパンジーの研究の魅力について熱く語り、自分自身も研究したいと思われているトピックのいくつかを紹介して下さいました。多くのことを成し遂げてなお研究に対する意欲を失っていないことに驚嘆しました。西田さんは尽きることのない興味深い研究への情熱をお持ちでした。西田さんがチンパンジーの研究について楽しそうに話す姿が今でも目に浮かびます。私も西田さんの研究への意欲を見習い、多くのアドバイスを胸に刻み、研究を続けて行こうと思います。

改めてご冥福をお祈りいたします。

西田さんとのタンザニアでのふたつの思い出

花村俊吉

京都大学

2005年10月15日、私は念願のマハレに向けてタンザニア・ダルエスサラームへ飛んだ。初の海外旅行で単身だったため、興奮と緊張で発熱。そうしたなか、マハレから帰る途中の西田さんと落ち合い、西田さんお気に入り「ニューアフリカホテル」にてご馳走をいただく。西田さん特有の軽快なテンポで、今回見てきたチンパンジーたちのドラマ仕立ての面白話がひたすら続き、別れを告げる頃には旅の緊張感もすっかり解消していた。

2006年7月31日、西田さんが再びマハレに到着する予定。私はすっかり現地にも慣れ、どっぷりとチンパンジー調査にのめり込んでいた。カンアナ・キャンプの地震で倒壊した私たちの調査小屋の再建もこの日に間に合うよう進め、西田さんとカソゲの森を歩くのを楽しみに待っていた。しかし、体調を崩され急遽来られなくなったとの連絡を、その翌日の朝に受け取る。今思えば、それが、この年の10月に発覚する癌の始まりだったのかもしれない。当時、M集団のチンパンジーたちは分散気味だったが、その二日ほど前から集合し始めた。ところが、31日を境に再び分散し始め、ほとんど観察できない日々が続くことになる。「チンパンジーたちはムゼー西田を出迎えるために集まったが、居なかったのがっかりして分散したのだ。」調査助手たちは、口々にそう言った。

急峻な観察路を駆け抜けて

稲葉あぐみ

(財)日本モンキーセンター

西田先生には、2001年にアルバイトに雇っていただいて以来10年間、ひとかたならぬお世話になりました。

2006年7月のウガンダ出張中に体調を崩され、10月に直腸癌が見つかりました。先生はその兆候を初期に見逃したことを大変悔いておられました。この年の6月には、マハレの花村さんから、病気流行によりチンパンジーが多数死亡したとの知らせが届いていました。「チャウシクが(ライオンに喰われて)いなくなったときは(僕は)まだ若かったが、今回のオパール、ミヤ、ピンキーの消失はショックでやる気をなくしてしまった」と沈めました。翌2007年8月にはマハレで一緒に過ごす恩恵に与りました。年末に手術されたとは思えないほどお元気で、急峻な観察路をチンパンジーたちと一緒に砂埃をあげながら駆け下り、私たちはあつという間に置いていかれました。ふもとで「(チンパンジーに)少しも遅れを取らなかった!」と誇らしげにおっしゃり、体力に自信を取り戻されたように見えました。ところが、翌年には病気が進行し、つらい抗ガン剤治療が始まりました。体調がよいときは仕事に没頭され、遺作となる“*Chimpanzees of the Lakeshore*”はMcGrew先生たちの献身的な協力も得て完成しました。原稿の最終チェックのため、入院先やご自宅へ頻繁に伺いましたが、亡くなる2週間前に電話でお声を聞いたのが最後になってしまいました。西田先生、長い間本当にありがとうございました。



チンパンジーを待ちながら(2007年8月)

Pan Africa News, Vol. 18, 特別号 日本語版

2011年9月発行

住所: 〒606-8502

京都市左京区北白川追分町

京都大学理学研究科・動物学教室・

人類進化論研究室気付

TEL: 075-753-4093

FAX: 075-753-4115

E-mail: pan.editor@gmail.com

URL: <http://mahale.main.jp/PAN/>

ISSN: 1884-751X (Print), 1884-7528 (Online)